

エッセイ

現代に息づく軍事郵便の息吹

—荻原浩「遠くから来た手紙」を読んで—

後藤 康行

はじめに

近代日本においては、外国との間で数多くの戦争や軍事衝突が発生した。そこには、残念ながら多くの犠牲者が生まれた。一人の死が家族、友人、知人、故郷、社会のなかにどれだけの衝撃、悲劇をもたらしたのか、現代に生きる我々が想像するのは簡単なことではない。

当時の日本において、軍隊が存在することは当然のこととなっていたとはいえ、強制的に多くの人間を戦地に赴かせる以上、戦争に巻き込まれる人たちのために何らかの措置を講じる必要が、国家には求められていた。近代日本にとっての初の対外戦争である日清戦争期に、兵士やその家族などに宛てて手紙を出すことを許可する軍事郵便制度が創設されたのは、自然なことであった⁽¹⁾。そして、制度ができると、日本人は数多くの軍事郵便を出すことになった。戦地と銃後は、軍事郵便を通してつながっていたのである⁽²⁾。

① 荻原浩「遠くから来た手紙」

人の「つながり」をいかに考えるか。つながりは、実際には目に見えないものだが、その目に見えないものの形の多様性に注目が集まる現代において、その存在を考えることは、人々をひきつけるテーマであるといえるだろう。

作家の荻原浩は、小説「遠くから来た手紙」(第155回直木賞受賞作品『海の見える理髪店』に収録、集英社、2016年)に軍事郵便を登場させている。「ユニバーサル広告社」シリーズや『誘拐ラブソディー』などのような、作品全体にどこことなく温かみがあり、登場人物たちの感情表現はユーモアにあふれ、読んでいて自然と笑みがこぼれてくる小説を数多く発表している荻原らしく、「遠くから来た手紙」も、まさに荻原作品の真骨頂といえるものであろう。筆者は文学研究者ではないので、数ある荻原作品のなかで、「遠くから来た手紙」をいかに位置づけるかなどという学術的な考察は行えないが、あくまでも素人らしく、とにかく楽しく読めたということは伝えたい。

荻原によると、「義母の遺品の中にこれ(軍事郵便=引用者)があって」、それは「妻の父が妻の母に宛てたもの」であるという⁽³⁾。荻原は、軍事郵便と無縁ということではないわけであ

1 日本における軍事郵便制度の創設は日清戦争開戦直前の1894年6月、廃止はアジア・太平洋戦争後の1946年11月である(郵政省編『続通信事業史 第三巻 郵便』財団法人前島会、1960年、209～212頁、郵政省編『郵政百年史資料 第二十九巻 郵政総合年表』吉川弘文館、1972年、46頁、164頁)。

2 軍事郵便の歴史について、筆者は本紀要の第2号から第7号まで、関連するテーマも含めた論考を連続で発表しているので参照されたい。

3 聞き手・構成山本圭子「インタビュー荻原浩」(『青春と読書』第51巻第4号、2016年4月)。

る。荻原の義母が残した軍事郵便の内容は、「子どもは元気かとか、切々と書かれていた」というものらしく、検閲のため「墨で塗りつぶされた部分」もあったという⁽⁴⁾。

筆者は歴史学の視点から軍事郵便研究を行っており、これまでに二千通以上の軍事郵便を読んだことがあるが、やはり戦地からの手紙の場合は、家族や家業の心配が記されているものが少ない。荻原の義母が残したのも、そのような便りが多かったのだろう。検閲については、実態が不明なところはあるが、戦時中の軍事郵便の数の多さ⁽⁵⁾から、検閲印が押されていたからといって、中身が詳細に調べられていたかどうかはわからない。もちろん、数多くの軍事郵便に接していると、墨塗り部分のある手紙を目にする機会はある。

さて、「遠くから来た手紙」の内容はいかなるものか、以下に紹介する。

残業続きの夫(孝之)に頭にきた祥子は、幼い娘を連れて、静岡で梨園を営む実家に戻る。実家には弟夫婦も転がり込んできており、祥子が落ち着ける場所はあまりない。かつての自分の部屋は、すでに弟夫婦に占拠されていたので、祥子は仏壇のある和室、6年前に亡くなった祖母の部屋で過ごすことになる。孝之はすぐに迎えに来ず、祥子のイラつきは消えない。夜になり、見知らぬアドレスからスマートフォンにメールが受信される。家族のことを気にかけているが、件名も本文も古めかしい内容で、祥子は孝之が送信したものと思い、ますます機嫌が悪くなる。翌日の夜も、メールが届く。やはり件名・本文ともに古めかしい。

翌日の朝、祥子は孝之に電話をかけると、孝之はメールのことは知らないという。そして、その日の夜も、同様にメールが届く。そこで祥子は、実家に戻った日に仏壇の収納棚から出し、しまい忘れてそのままにしていた箱があることに気づく。そこには、手紙の束があり、そのなかに戦地で亡くなった祖父からの手紙(軍事郵便)も入っていた。その軍事郵便の内容は、スマートフォンに届いたメールとほぼ同じ内容であった。祥子は、届いたメールは祖父母が自分を心配してくれたものだと感じ、翌朝東京へと帰る。

以上が内容である。夫婦間に生じたずれが原因で実家に戻ってみるも、祥子の立場は微妙なものになっていた(義理の妹からすると、なんとなく邪魔)。しかし、あり得ないような形で祥子に軍事郵便が届き、そこに亡くなった祖父母の自分への思いを感じ取った祥子は、気持ちを大きく変化させることができた。

祥子は、離婚まで考えているわけではなく、夫婦仲も破綻しているとはいえない。実家の家族たちも、義理の妹を含めて、祥子を本当に邪魔者扱いしてはいない。しかし、祥子は父親と口喧嘩になる。ただ、家族はたいがいそうであろう。つながりは目に見えないのだから、仕方ない。だからこそ、祥子の気持ちは落ち着かなかつたのだろうが、軍事郵便を通して、祥子は目に見えなかつたつながりを実感することができたのである。荻原は、その場面を「大きな、目には見えないけれどとてつもなく大きな、そして深くて優しい何かに包まれた気がして、祥子は心から安堵していた」と表現している(『海の見える理髪店』118頁)。「遠くから来た手紙」を読み、かつて戦地と銃後のつながりを実現していた軍事郵便の息吹が、現代においても息づいていると筆者が感じ取るのは、感傷的に過ぎるだろうか。

なお、荻原浩には「バァバの石段」という作品もある(『千年樹』収録、集英社、2007年、集英社文庫化は2010年)。ここには軍事郵便は登場しないが、それと近いような手紙が出てきて、その手紙が現代に生きる人のつながりに影響を及ぼしている。「遠くから来た手紙」と併せて、

4 同前。

5 推計も含まれた数字であるが、1937年から41年の5年間は、毎年4億通前後の軍事郵便が発信されていた(前掲郵政省編『続通信事業史 第三巻 郵便』948~949頁)。

読んでもらいたい作品である。

現代を代表する戦争文学作家である古処誠二にも、「銃後からの手紙」という作品がある（『線』収録、角川書店、2009年、角川文庫化は2012年）。同作の舞台はアジア・太平洋戦争末期であり、過酷な戦地にいる兵士たちが主役となっている。ここでは、日本の兵士たちの軍事郵便は登場しない（兵士たちは家族に宛てて軍事郵便を出してはいる）。登場するのは、兵士たちが殺害した敵兵が持っていた、敵兵の母からの手紙である。そして、その手紙に触れたことから、帰ることがもはや不可能となっている故郷に「執着」してしまう日本の兵士たちが描かれている。やはり、ここでも人のつながりを考えさせる素材として、軍事郵便が選ばれているといえるだろう。

② 河内仙介「軍事郵便」

軍事郵便が文学作品に登場するのは、現代に限ったことではない。実際に制度として存在していた時代にも、文学作品のなかに登場していた⁽⁶⁾。ここでは、河内仙介「軍事郵便」を紹介する。同作は第11回直木賞受賞作品で、1940（昭和15）年に『軍事郵便』として単行本化された（新潮社、「軍事郵便」以外の収録作品は、「遺書」、「あいす・きゃんでい」、「山で果てる」、「縮絨帽子ふえると・はつと」）。

その内容は、以下の通りである⁽⁷⁾。交番勤務の芝村巡査は、1909（明治42）年（作品内では和暦のみ表記）10月、大阪のとある「貧民街」が担当区域となる。ある日の夜、この街の長屋に住む車夫東稔貞吉の息子貞造が一人で徘徊しているのを呼び止める。話を聞くと、父親が帰ってこないという。翌朝、貞吉の家に行ってみると、すでもぬけの殻であった。芝村は、貞造を引き取り育てることにする。

貧しいながらも大事に育てられた貞造は、小学校を卒業すると鉄工所で働くようになる。優れた鉄工技師として、家計を支えるまでに成長する貞造。その後芝村は病に倒れ、貞造と自分の娘との結婚を見届けて亡くなる。芝村の妻も、その後を追うように亡くなる。昭和に入ると貞造は独立し、自らの工場を興す。工場は拡大し、日中戦争期には財閥と手を組むことで、貞造は軍需品生産工場を経営する会社の専務となった。

自らの生活が安定していくも、貞造はどうしても実の父親のことが忘れられない。1938（昭和13）年1月、新たな年を迎えた仕事始めの日、従業員名簿に何気なく目を通していた貞造は、父と同じ名字（東稔）の工員（義次郎）がいることに気づく。貞造は、義次郎を呼び、話を聞くも雑談ばかりで肝心なことは聞けなかった。それから間もなく、義次郎の父は亡くなり、義次郎には召集令状が届く。貞造は、出征する義次郎の見送りに行くだけでなく、出征後は手紙や慰問袋を義次郎に送った。出征から半年後、戦地から義次郎の手紙が届く。その中身は、自分が決死隊に選ばれたこと（作戦の詳細は描かれていない）、自分が貞造の弟であること、父親が貞造を捨てることになった理由、自分が素性を明かさなかった理由、兄への思いなどを告白したものであった。

筆者は以前、この「軍事郵便」について考察したときに、小説の最後に出てくる軍事郵便は義次郎の遺書のようなものであり、同作は戦時中の軍事郵便がもつ性質の1つとして確認され

6 筆者はこれまでの研究のなかで、軍事郵便が登場する文学作品をいくつか紹介してきた。詳しくは拙稿「メディアに描かれた軍事郵便—イメージにみる戦地と銃後—」（『専修史学』第45号、2008年11月）、同「戦争を描く、軍事郵便を描く」（『歴博』第189号、2015年3月）を参照されたい。

7 前掲拙稿「メディアに描かれた軍事郵便」でも、河内「軍事郵便」の内容は紹介している。

ている、遺書としての軍事郵便を描いたものだと述べた⁽⁸⁾。戦地と銃後をつなぐはずの軍事郵便で、死という、関係の断絶を伝える。それは、一見すると矛盾していることのように思える。しかし義次郎は、この軍事郵便のなかで初めて自分が貞造の弟であることを打ち明けた。また、父親は貞造に申し訳ないと終生思っていたことも。ここで登場した軍事郵便は、永遠の別れを告げる内容ではあったが（義次郎が戦死したかどうかまでは描かれていない）、家族としての新たなつながりを表明するための手紙でもあった。

「軍事郵便」は、直木賞受賞作品である。当時において、それがどれほどの意味を有しているのか、筆者にはわからない。ただ、少なくとも賞の受賞は、軍事郵便は人のつながりを実感させるものであるという認識が、当時の国民の間で一定程度共有されていたことの証であるといってもよいのではないだろうか。

おわりに

人間関係というものは、単純化できないものである。そして、多種多様な関係が認められるべきものである。特に現代社会は、家族、夫婦、恋人、友人、知人、様々な関係において、型にはまった見方をしているのは、気づかないところで人を傷つけていることになる可能性がある。そのような時代の文学作品のなかで、軍事郵便を登場させる。そのことの意味をいかに考えるべきか。

軍事郵便を歴史学の視点から研究している筆者としては、戦時中に戦地と銃後の「つながり」を生み出していた軍事郵便の性質に注目したい。たとえ人間関係が多様であろうとも、そこには必ず何らかのつながりが存在する。軍事郵便は、時には死（別れ）を伝える役割も担っていたが、それも含めて人のつながりというものは新たな方向性へと向かわざるを得ない。生きるか死ぬかという問題が身近であった戦時という時代の産物である軍事郵便だからこそ、人のつながりを考えるときの素材に適しているのではないだろうか。

人が決して目にすることはできない「つながり」というものを、戦時中は戦地と銃後に実感させていた軍事郵便。その軍事郵便が残した息吹は、現代社会においても確実に息づいていると、筆者は考えている。

(ごとう やすゆき 千葉商科大学 国際教養学部 非常勤講師)

8 前掲拙稿「メディアに描かれた軍事郵便」。なお、軍事郵便の遺書としての性質については、藤井忠俊が『兵たちの戦争 手紙・日記・体験記を読み解く』（朝日選書、2000年）のなかで言及している（57～73頁）。